

2008年度「女性の学習の歩み」研究セミナー 実施報告

【開催日時】2009年2月19日(木)

【会場】日本女子会館

本財団では1991年度より、女性が自ら切り拓いていった学習活動の掘り起こしを目的に、「女性の学習の歩み」実践・研究レポート募集事業を行っています。今年度は、下記の3篇が佳作を受賞されました。2月19日の「女性の学習の歩み」研究セミナーでは、授賞式と選考結果報告を行いました。

佳作 新井純子さん 「孤から個へ - そして人とつながって」

佳作 内田晴代さん 「学びで紡ぐ人の「縁」 - 学ぶ楽しみからチャレンジへ」

佳作 長谷部美佳さん 「子育てサロン日本語教室と生活相談
- 外国籍のお母さんたちのサポートと私の経験」

(入選該当なし)

授賞式ならびに受賞レポートの報告

賞状ならびに研究奨励金(佳作5万円)の授与、受賞レポートの報告が行われました。



(左から)
新井さん 内田さん 長谷部さん

新井純子さん 「孤から個へ - そして人とつながって」

今回で3度目の応募です。昨年の研究セミナーで「挑戦します！」と宣言してしまったことや、長年の企画が具体的に動き出したこともあって、「人生の節目だ、書いておかなければ」と、再々応募しました。いつも同じことを書いている気がしますが、気が済むまで何度でも同じことを書いていると、その都度、新しい自分を発見することができます。

内田晴代さん 「学びで紡ぐ人の「縁」 - 学ぶ楽しみからチャレンジへ」

これからどう生きていくか、また、現在の活動について考えるきっかけにしたいと思いました。執筆中、さまざまな活動してきたことを誇りに思いつつ、自分が本当にやりたいことは何なのかを問い続けました。今、学習成果やボランティア活動が正当に評価される仕組み・社会をつくり上げていくことが課題なのだ、改めて考えています。

長谷部美佳さん 「子育てサロン日本語教室と生活相談 - 外国籍のお母さんたちのサポートと私の経験」

書くことで改めて、支援するだけではなく、自分も外国人女性たちに支援してもらっているから活動を続けられているのだと再認識しました。2年続けての応募もよかったと思っています。1年目の応募でいただいた講評を読んで、自分の書いた文章は確かに散漫だったり、焦点が定まっていなと気づきました。文章を書くということについて、非常に勉強になりました。

受賞者・選考委員を交えての グループ・ディスカッション

各自の活動や課題、女性の学習や活動、記録を残すことの意義などについて、活発な議論が交わされました。



選考委員の講評



選考委員長：村田晶子さん



選考委員：奥田暁子さん



選考委員：廣瀬隆人さん

選考基準を全て満たすのは大変と感ずるかもしれませんが、生きること、活動することそのものです。また、こういう視点で学習を組織したり考えていくことはとても大事です。研究論文であったり学問的な言葉を使ったりする必要はありません。生活の中にある言葉でのふり返りを積み重ねながら、女性たちが社会をつくっていく力を備え、社会を変えていくということを意識して行ってほしいと思います。
(村田委員長)

自己省察の深さやジェンダー視点からの考察が選考の分かれ目になりました。学びはエンパワーの原動力だとつくづく感じました。ただ、「日本社会あるいは歴史の中での位置づけ」という点が弱い。自分史、自分の活動史というテーマで書くどうしても、自分や身近な人間関係が出発点になります。それは当然なことですが、そこでぶつかる問題を普遍化していくことが重要です。社会や歴史の中の問題として考えていてください。
(奥田委員)

型通りの話や常套句ではなく、自分の言葉で表現してほしいと思います。苦しんだり、葛藤したり、不安だったり、苛々したり、不満に思ったりする自分を大事にしてほしい。魅力的なレポートとは、歪んだ自分も時に出しながら書いたものです。年代記的に事実を列記するのも悪くはないですが、自分は社会をどう受け止め、社会との関係の中で自分はどう変わり、社会にどう働きかけたのか、社会と自分との関係について書いてください。
(廣瀬委員)

参加者の感想

- ・受賞者の率直な話が聞けて大変興味深かった。
- ・「生活の中にある言葉で整理すればよい」という選考委員のお話に、「考察して書く」ことが私にもできるかもしれないと思った。
- ・書くのは大変なことと思っていたが、「自分のために書く」「書かずにはいられないから書く」という受賞者の言葉に励まされた。

受賞者の感想

受賞の喜び、発表のプレッシャー、新しい方々との出会い、女性史やジェンダーの学び等、短い時間に多くのことが凝縮された1日でした。選考委員の講評を参考に、続編を書いてみたいと思います。今回の受賞に恥じることはないよう、自分らしさを失うことなく、活動を続けていきます。